

タイトル	北海学園大学人文学部2022 年度優秀卒業研究賞
著者	
引用	北海学園大学人文論集(75): 37-54
発行日	2023-08-31

北海学園大学人文学部 2022 年度 優秀卒業研究賞

講 評

2023 年 3 月 10 日

人文学部長 小 松 かおり

今年の優秀卒業研究賞は、力作揃いでした。4 年間学んだ成果を存分に発揮しようという意欲に燃えた研究ばかりで、審査する側も力が入りました。

最優秀賞を受賞した武田佑希子さんの「現代における揖屋地区住民の『黄泉比良坂』観——黄泉比良坂伝承地と揖夜神社穂掛祭・一ツ石神幸祭——」は、審査委員全員一致で選出されました。『古事記』において、黄泉国と葦原中国を繋ぐ「黄泉比良坂」は、「出雲国之伊賦夜坂」、現在の島根県松江市にあるとされます。黄泉国と葦原中国の位置関係が『古事記』の世界観を表すと考えられたため、江戸時代の国学者から戦後の民俗学者に至るまで、「黄泉比良坂」が現実にとどのような場所であるかを論じる動きがありました。本研究は、彼の地であると言われる島根県松江市東出雲町の地域住民の解釈とその変遷を明らかにすることを目指した研究です。

この研究の魅力的な点は、江戸時代以降の主な議論を踏まえ、また、大正時代以降の文献研究を十分におこなった上で、GIS を用いて調査地の景観の変化を確認し、さらには、実際に松江市にフィールドワークに赴き、伊耶那美命を祭神とする揖夜神社で行われる穂掛祭・一ツ石神幸祭を観察し、地元の人たちが祭りの中で語ることばを聞いて、祭祀と伝承がどのように関係しているのかを検証する、という複合的な方法を用いた点です。いわば、神話研究に、文献研究、地理学、人類学を採用したわけです。その結果、「現存する場所」にどのような意味が重ねられ、その意味が共有さ

れたり共有を拒否されるのか、ということがより住民の実感に近いと思われるレベルまで明らかになりました。

例年、優秀卒業研究賞は、最優秀賞と、言語・文学・思想・歴史・環境の各分野と英語で執筆した論文から選出された優秀賞が選ばれます。しかし、今回の審査では、最優秀賞は逃したものの、例年であれば最優秀賞を受賞した可能性があるとして評価された研究があったため、特別に、「特別優秀賞」を2本選出しました。

松久楓さんの「琉球列島における旧石器時代の人類活動——研究の動向と考古学的視点からみた今後の展望——」は、旧石器時代の琉球列島の考古学に関するレビュー論文です。琉球列島の考古学は、近年多くの成果を上げており、なかでも、2009年以降に沖縄本島南部で発掘が進むサキタリ遺跡からは、旧石器時代以降の道具類が多く出土しています。松久さんは、2000年代の新しい研究を中心に、120本もの先行研究から、旧石器時代の人類活動研究を整理しました。この論文は、資料の多さに加えて、考古・形質人類学・地理・地質・生物・気象・遺伝学など多くの関連分野を網羅しています。また、これまで琉球列島の環境利用が石器と骨角器を中心に語られてきたことに対して、貝の利用から検討し直すことの重要性を指摘し、サンゴ礁が発達する以前から世界最古の可能性もある釣り針を使用した漁撈が存在したことをはじめ、島嶼環境を生かす柔軟な技術が発達してきたことを論じたこと、また、それを、オセアニアから日本列島までの広大な地域の中において論じたことなど、論点の的確さと視野の広さも評価されました。小さな証拠の積み重ねからスケールの大きなテーマに挑む考古学の魅力を示した論文です。

中嶋奏子さんの「『ネイポップ』の実態と表象の比較研究」は、18世紀半ばのイギリスで「ネイポップ」と呼ばれ、特別な眼で見られた人びとについて、その実態と表象の差異を明らかにした論文です。「ネイポップ」は、若くしてインドに渡り、イギリス東インド会社の社員として働き、さまざまな方法で蓄財して帰国し、その財力でイギリス本国で「ジェントリ」の仲間入りをした一方で、蓄財方法について激しく非難された人びとです。

ネイポップは、イギリス本国では論じられてきたものの、先行研究が少ないだけでなく、一般の知名度も低く、わたし自身、この論文ではじめて「ネイポップ」の存在を知りました。本論文では、この魅力的な対象にいくつかの視点から取り組んでいます。ひとつは、先行研究を掘り下げて、下院議員となったネイポップについて、選挙区や当選回数などを分析して、議員としてのネイポップの実態を数量的かつ経時的に追う視点です。もうひとつは、ネイポップが活動していた時代に発表された戯曲と小説を分析し、当時のネイポップ像を明らかにする視点です。後者で分析された『人間というもの』という小説は、邦訳されておらず、中嶋さん自身が翻訳して分析しました。下院議員の属性という基礎的な資料分析と、文学作品における表象という2面からネイポップの実態と表象を追ったこの作品は、非常にユニークであり、読み応えがありました。また、邦訳されていない資料を探し出して分析した点も高く評価されました。

優秀賞には、言語分野から木村実結さんの「日韓母語話者の友人同士における不同意の言語行動の対照研究——ポライトネスに注目して——」と、英語論文として、鷺見知也さんの「An Analysis of Overlap in the TV Comedy "Sam & Cat"」が選ばれました。

木村さんの論文は、日本語と韓国語それぞれの母語話者の友人どうしの不同意表現について、先行研究の方法論を借用して比較したものです。8ヶ月の韓国・大田大学校における交換留学で培った語学力と人間関係を生かして、韓国4組を含む計9組の会話を分析しており、韓国語の生の会話データから分析するという語学力を生かした方法で丁寧な分析をしたことが評価されました。

英語で論文を執筆した鷺見さんは、カナダ・レスブリッジ大学への8ヶ月の留学中に論文を執筆しました。鷺見さんは、会話のターンテークングをテーマとして選び、会話の中のオーバーラップがどのように関係を構築するのに役に立つのか、という問いを立てました。もともとは生の会話を分析しようと計画していましたが、セッティングの難しさから、ドラマの分析に変更しました。ダウンロードしたドラマのスクリプトを元に、実際



の会話のオーバーラップを確定していくという細かい作業を経て分析し、先行研究の整理と自分の研究の位置づけの正確さ、分析の丁寧さが評価されました。

今回の優秀研究には、「表現したいこと」、言い換えれば、自分のテーマがはっきりしている論文が多かったです。自分が学んだスキルを生かし、ことばを練って、自分の考えたことを表現したこれらの論文は、「考える力」と「表現することば」を身につけてほしいと考えている人文学部の教員として、とても嬉しい成果です。

また、いくつかの視点や方法論を組み合わせた独創的な研究が複数見られました。北海学園大学の人文学部では、特定の狭い専門分野に特化した学びというよりは、言語・文学・思想・歴史・環境という5つの分野にまたがる幅広い学びを提供しており、学生ひとりひとりが「自分」を中心として、学びを組み立ててほしいと考えています。そのカリキュラムを存分に生かした卒業研究が複数あったことは、日々迷いながら教育に取り組む教員の励みになりました。また、道外に資料収集にでかけたり、フィールドワークしたり、留学で学んだことを生かした研究も見られました。在学

中に、座学だけでなく、多様な体験をして、そこで身につけた学びを生かしてくれたことが非常にうれしいです。

今年度の卒業生は、大学時代のうち3年間を、新型コロナウイルスの流行の中で過ごしました。また、最後の1年は、ロシアのウクライナ侵攻によって、世界はどうあるべきか、これからどうなるのか、ということを否応なく考えさせられたことと思います。

人文学部では、「ことば」を武器として、答えのない、しかし重要な問いを見つけ、自分の頭で考え、考えていることを正確に表現し、人のことばをしっかりと受けとめ、対話できる人を育てたいと考えています。こんな時代だからこそ、卒業するみなさんには、これからも、人文学部で身につけた生きるために考える力を生かして、答えのない問いに向き合いながら生きていくことを願っています。

最優秀賞（要旨）

思想文化群



現代における掛屋地区住民の「黄泉比良坂」観 —— 黄泉比良坂伝承地と掛夜神社穂掛祭・一ツ石神幸祭 ——

武田佑希子（2部日本文学学科 指導教員：鈴木英之）

黄泉比良坂は、『古事記』の世界観やその境界性について、また古代の死生観を決定づける重要な要素として、長きにわたり多くの研究者が注目してきた。しかし、黄泉比良坂にまつわる先行研究では、そのほとんどが黄泉比良坂を黄泉国と葦原中国との位置関係を判断する基準のひとつとみなし、黄泉比良坂を『古事記』の世界観を検証する上で議論の対象としている。

そこで本研究では、『古事記』の伊邪那岐命の黄泉国往還譚が、神話世界を現実世界の出雲国の伊賦夜坂に投影させる一文「今、謂出雲国之伊賦夜坂也。」で締めくくられていることに着目し、黄泉比良坂の現地比定をめぐる古今の議論、黄泉比良坂伝承地、コラムに登場する掛夜神社の穂掛祭・一ツ石神幸祭について、それぞれ資料研究とフィールドワークを行い、比較検討した。それらを踏まえた上で、掛屋地区住民の黄泉比良坂とのキョリ感を「黄泉比良坂」観として示し、先行研究では取り上げられてこなかった地域住民の視点を明らかにすることで、黄泉比良坂に対する解釈の多面性を明らかにできると考えた。

黄泉比良坂は、いわゆる黄泉国往還譚の中に見える地名で、一説に生と死の境界とされる。『古事記』上巻によれば、伊邪那美命は火の神を産んだ際の火傷がもとで死に、死者の国である黄泉国へと行ってしまふ。悲しんだ伊邪那岐命は、伊邪那美命を葦原中国に連れ戻すため黄泉国に赴いたが、「見るな」の禁忌を犯し、伊邪那美命の変わり果てた姿を見たことでその怒りを買ひ、黄泉国から逃げ出すことになった。黄泉醜女に追われながら黄泉比良坂まで逃げ帰ったところで、伊邪那岐命は伊邪那美命がこれ以上

追ってこれられないよう、黄泉比良坂に千人でやっと動かすことのできる大きな岩「千引の石」を置いて坂を塞ぎ、伊耶那岐命と伊耶那美命は訣別、これ以降、黄泉国と葦原中国は断絶された。そのとき、伊耶那美命は「葦原中国の人草（人間）を一日千人殺す」と言い、伊耶那岐命は「それならば一日千五百人生まれさせる」と答えることで、人間の生死が決まったという。

この黄泉比良坂を、『古事記』の「故、其所謂黄泉比良坂者、今、謂出雲国之伊賦夜坂也。」という記述にもとづき、現在の島根県松江市東出雲町揖屋に比定する説がある。また、2015 年に発行された『松江市史』における「黄泉比良坂」の項では、「東出雲町には「黄泉ひら坂」と称する場所がある。どこがそこなのかということはあえて言及しない」と現地比定を避けながらも、同書収録のコラムによると、黄泉比良坂で訣別した伊耶那岐命と伊耶那美命には、地元住民によって語られるその後のストーリーが示される。それは揖夜神社の穂掛祭・一ツ石神幸祭にて、伊耶那美命が年に一度、一ツ石で待つ伊耶那岐命のもとに会いに行っている、というものだ。

神話の地名が、いかに現実の地に定められ、さらには『古事記』をこえる後日譚が創出されたのか。まず、黄泉比良坂を巡る学者の説や自治体の認識を考察するため、主に『島根縣史』、『東出雲町誌』、『松江市史』の3つの自治体史を文献資料として使用した。いずれも「黄泉比良坂」に関する項があり、特に自治体が黄泉比良坂をどのように解釈し、継承しようとしていたのかを考察することができる。1921 年の『島根縣史』では、黄泉比良坂の伝承地の所在は古来より2か所とされ、1つは「揖夜神社御由緒書」を引用して八束郡揖屋村にあるとして、現在の比定地周辺の旧字である「平賀」の記載が確認できた。そして、もう1つは八束郡岩坂村大字日吉、劔神社のあたりとしている。1978 年の『東出雲町誌』では現実の地に対する断定を避けているが、「平賀」の地名が確認でき、さらに建設当時の伝承碑の写真も掲載している。また、2015 年の『松江市史』では『東出雲町誌』と同じく伝承地への直接的な言及を避け、「黄泉比良坂」は「四方つひら坂」であった可能性が高く、死者の国である黄泉へと通じているので

はなく、根の国や海原などにも通ずる文字通り「四方に開かれた坂」ではなかったか、という説を採用し、さらに別の項には江戸時代の国学者後藤夷臣が出雲国をフィールドワークした際の「海辺のなだらかな地である揖夜神社よりも劔大明神のある山のほうが“大石墨々”としていて「黄泉比良坂」にふさわしい」との一説を記載している。これらの文献資料から、1940年に当時の揖屋町長である佐藤忠次郎氏が「神蹟黄泉比良坂伊賦夜坂伝説地」と彫られた石碑を設置した現在の黄泉比良坂伝承地は、設置以前より比定地として語られていた場所であったということがわかった。

しかしながら、現在の伝承地以外にも「劔神社」など他の地名も見受けられたため、黄泉比良坂の現地比定をめぐる古今の議論を整理し、図表化することで、江戸時代の国学者をはじめとした研究者がどのような条件のもと黄泉比良坂の比定地を検討してきたのかを比較した。また、地理情報システム(GIS)を使用して、調査対象地のポイントデータを作成し、国土地理院発行の旧版地形図に位置情報を付与(ジオリファレンス)し、基盤地図情報とレイヤーで重ね合わせることによって、調査対象地の地形や過去と現在の景観変化を確認した。その結果、黄泉比良坂の比定条件には、地名や地形、千引の石の有無、黄泉比良坂が持つ役割の「境目」であるか等を挙げることができ、それらの組み合わせを複合的に見て「どこがより黄泉比良坂らしいか」によって現地比定を行っていることがわかった。

そして、現在の黄泉比良坂伝承地について、資料収集と現地調査を行った。当該の伝承地は、2010年公開の映画「瞬 またたき」(監督:磯村一路)の中で「あの世とこの世を繋ぐ坂」としてロケ地に使用されたり、また地元の保存会等によって亡き人への思いを記した「天国への手紙」を投函するためのポストが設置されたりと、『古事記』に見られる伊耶那岐命と伊耶那美命の決別の場所、また「黄泉国と葦原中国の境」としての場所の役割が「亡くなった人とのつながりを感じることできる場所」、「あの世(天国)とこの世の境目」として転化していることがわかった。周辺の整備も地域住民のボランティア等によって行われており、伝承地に訪れる人を大切に、観光地としてさらに盛り上げていきたいという認識が見受けられた。

さらに、揖夜神社の穂掛祭・一ツ石神幸祭の当日は祭祀の観察調査を行い、祭祀の前後には関係者や地域住民への聞き取り調査を行った。「一ツ石で伊耶那岐と伊耶那美が一年に一度会う」というストーリーを語る地域住民に出会うことはできなかったが、揖夜神社の祭祀を通して見えてきた氏子や関係者の「継承」への思いをうかがうことができた。

以上の黄泉比良坂にまつわる文献資料と現地調査の分析から、各々の立場による関心の違いや、スタンスの違いも明らかになった。「黄泉比良坂」の学術研究においては、本文で現実の場所と関連付けている事実と、現在の東出雲町にその場所である「といわれている」比定地があることをあまり重要視していない。その一方で自治体では、時代によって「黄泉比良坂」に対して異なる言説を採用したり、そもそも伝承地に対する見解を避けたりしながらも、地域住民によって語られるとされる伊耶那岐命と伊耶那美命にまつわるアフターストーリーを掲載するなど、観光資源であれば事実か伝承かは問わず積極的に採用するといったスタンスが垣間見られた。さらに、現地調査で出会った地域住民は、神話の「黄泉比良坂」を石碑が設置されている伝承地かつ地域の重要な観光資源として捉えており、また、揖夜神社は平安朝以前から広く知られた古社であり、その祭祀も田の神への感謝と豊作豊漁を祈念するもので、江戸時代後半以降に制作されたと考えられている本殿内の壁画にも描かれているような歴史ある神事として現在も執り行われている。地域住民は、神話と祭祀について、それぞれを異なる目的や意図を持って受け継ぎながら、地域住民の「黄泉比良坂」観を形成していた。

本研究の目的は、「黄泉比良坂がどこにあるのか」を明らかにするのではなく、「黄泉比良坂といわれている場所」について、現在の地域住民がどのような解釈のもと「といわれている」ことを認識しているのかについて明らかにすることである。今回の調査においては、『古事記』における黄泉国往還譚にまつわるストーリーや、地域住民によって語られるとされる伊耶那岐命と伊耶那美命のアフターストーリーと揖夜神社の祭祀との混淆は見られなかった。しかし、黄泉比良坂や揖夜神社祭祀にまつわる解釈や認識

が、今後も変わらぬまま受け継がれていくのか、もしくは時間の経過によって変化していくのかは、どちらの可能性も否定できない。「黄泉比良坂」に対する研究をさらに深化させるためには、対象地に対して今後も継続的な観察と調査を行いながら、『古事記』に描かれている「黄泉比良坂」という場所がこれまでどのように解釈されてきたのか文献学的研究によって時間を遡り、理解を深めていくことが必要であると考ええる。

特別優秀賞（要旨）

環境文化群



琉球列島における旧石器時代の人類活動 —— 研究の動向と考古学的視点からみた今後の展望 ——

松久 楓（1 部日本文化学科 指導教員：手塚薫）

本論文は、琉球列島旧石器時代における人類活動の様相について、先行研究を整理した上で、周辺地域という地理的な広がり（ヨコ軸）と貝塚時代という時間的な流れ（タテ軸）の2つの軸を用いた比較からその特徴を検討し、今後の課題を明らかにすることを試みたものである。

琉球列島は長らく、旧石器時代の人骨は見つかるものの、石器などの人工遺物の出土が乏しい地域であったことから、人類学的研究が中心となって展開されてきた。しかし、近年になってから「世界最古の釣針」など新たな発見が相次ぎ、人類学的視点からだけでなく、考古学的視点からも研究を進めることが可能になりつつあるというのが現状である。

人類が渡来した更新世末期から現在に至るまで、琉球列島は常に海によって大陸から隔てられた島嶼環境にあり、九州以北の日本列島とは異なる歴史を歩んできた。現在確認されている旧石器時代遺跡は15遺跡程度で、沖縄諸島以南の遺跡は全て人骨出土地であり石灰岩層中に形成された洞穴や裂罅（フィッシャー）である。人骨からは、形態学的分析やDNA分析、炭素・窒素同位体比分析など、琉球列島旧石器時代に生きた人々はどうのようなルーツを持つ集団であったのか、どのような生活を営んでいたのかを明らかにするための研究が行われてきた。考古学的研究としては、かつて「叉状骨器」の存在が提唱されていたが、現在ではシカの異食行為による偽骨器であることが判明している。また、人類学的研究の流れを汲んだ「不定形剥片石器文化」の「北上仮説」も提唱されているが、仮説を裏付けるような物証に乏しく積極的な支持は得られていない。沖縄島南城市のサキタリ洞遺跡からは「世界最古の釣針」や赤色顔料が付着した貝製

ビーズ、大量のモクズガニ・カワニナが出土しており、シンプルな技術と身近な資源をきめ細かく利用する柔軟性で島嶼環境に適応した旧石器人のあり方が山崎真治氏により主張されている。

タテ・ヨコ軸を用いた比較からも、琉球列島における旧石器時代の人類活動の様相は、一般に資源が乏しいとされる島嶼環境で、身の回りの資源を効果的に利用したと考えられる柔軟性という特徴によって捉えることができるのではないかという結論に至った。この柔軟性はヒトの想像力から生まれるものであり、もので溢れた現代に生きる我々が学ぶ意義は大きいと考えられる。

今後の課題としては、さらなる資料の蓄積と分析方法の確立があげられる。今回の分析によって捉えられた特徴は限られた資料に基づくものであり、個別具体的な事柄に踏み込んで分析することもかなわなかった。そこで、大学院ではまず、琉球列島先史時代を通して確認されている貝殻利用について、旧石器時代と比較して資料が豊富に発見されている貝塚時代の様相を明らかにする研究に取り組んでいく必要がある。

歴史文化群



「ネイポップ」の実態と表象の比較研究

中嶋奏子（2部英米文化学科 指導教員：仲丸英起）

本論文では、18世紀中葉から末頃にかけて、インドで富を蓄え帰国した東インド会社員であるネイポップについて考察した。当時のイギリスではネイポップが激しく非難されたが、その評価は正当だったのか。正当でないとするとそれはいかなる理由によるものなのか。ネイポップの実態と、イギリスの文学や戯曲で表象されるネイポップとを比較することで、イギリス人がネイポップに対して抱いていたイメージと実態の相違について明らかにした。

日本国内のネイポップ研究は等閑視され続けた期間が長く、先行研究が

比較的少ない。特に文学作品で描かれるネイボップとネイボップの実態とを比較した研究は、文学研究者の先行研究にいくつかみられるものの、歴史に軸足を置いたものは非常に少ない。史料と文学作品をもとにネイボップの実態と表象を比較研究することで、ネイボップに対する評価と当時のイギリス社会との関係性を明らかにしたことが、本論文の特徴である。また、ブリテン帝国がインド植民地支配を進める上で、人間に本能として備わる「性（セクシュアリティ）」をどのように政策として利用したのか考察した。ネイボップがどのようにインドの女性たちと関わりをもち、それがいかにインド植民地支配に影響を与えたのか分析した。彼女たちに焦点を当てた国内の先行研究も非常に少ないため、これまでの国内の先行研究とは別の角度から、ブリテン帝国のインド植民地支配について分析できたのではないかと考えられる。

構成は以下のとおりである。第一章では、ネイボップと呼ばれたのはどのような人々だったのか、彼らのインドでの生活について考察した。第二章では、ネイボップに対するイギリスでの評価、および下院議員になったネイボップについて、先行研究や史料をもとに分析した。ネイボップは出自の低い者が多かったが、インドで成した財産をもとに地方に所領を買い議席を求め、「ジェントルマン」としての生活を送った者が存在した。こうしたイギリス議会史の中でのネイボップの存在について考察した。第三章では、サミュエル・フット著の喜劇『ザ＝ネイボップ』（*The Nabob, a Comedy, in Three Acts*）（1772 年初公開）およびロバート・ベイジ著『人間というもの』（*Man As He Is*）（1792 年）をもとに、ネイボップの表象について考察した。『ザ＝ネイボップ』は、「ネイボップ」という社会層の存在を、あるいは少なくとも「ネイボップ」という言葉そのものを、広く世間に知らしめたという点で、きわめて貴重な歴史的資料であると思われる。そのため多くの先行研究で論じられているが、本論文でも改めて本作品の分析を行った。『人間というもの』は、英語およびドイツ語で刊行されているが、日本語は未刊行である。そのため和文の先行研究はなく、欧文の先行研究はいくつかあるものの、ネイボップに焦点を当てたものではない。

『ザ＝ネイポップ』がロンドン・ハイマーケットの劇場で上演されたのは1772年だったが、本作品はそれから20年後に刊行された。第三章の後半では20年の間にどのようにネイポップ像が変化したのか、「時間的経過」によるネイポップの表象の変化に焦点を当てた。

以上のように、本論文では政治、文化、文学という多角的な視点をもとに、独自の分析を加えネイポップについて考察した。

優秀賞（要旨）

言語文化群（言語）



日韓母語話者の友人同士における不同意の 言語行動の対照研究

—— ポライトネスに注目して ——

木村実結（2 部英米文化学科 指導教員：田中洋也）

本研究は、大学生を調査対象者とし、日本語・韓国語における不同意表明の会話対照分析を通し、日韓両国のコミュニケーション方法の類似点・相違点を明らかにすることを目的として行った。研究の結果により、日本語を学ぶ韓国人、韓国語を学ぶ日本人の学習に貢献することも目的とした。研究課題は次の三点である。(1)日本語母語話者大学生、韓国語母語話者大学生は不同意の意思を表明する際に、どのような不同意緩和表現を用いるのか、(2)韓国語母語話者大学生は不同意マーカー、不同意発話行為などをどのような方略で用いるのか、(3)両言語の不同意意思表明は、いかなる点が共通しており、いかなる点異なるのか。

本研究は、日韓母語話者における親密な間柄の会話におけるポライトネスのあり方を探る目的を持って行うものである。そのため、扱う会話データは、日韓母語話者の親しい間柄の課題解決型議論とした。調査は、日韓それぞれ 10 名、日本 5 組、韓国 4 組、計 9 組の会話を収集、分析対象とした。会話の収録は 2022 年に行われ、参加者には友人と 2-3 名ほどで議題に関して自由な 20 分程度の会話とその撮影を依頼した。

すべての会話データを文字に書き起こし、先行研究を参考に不同意マーカー、不同意緩和表現、不同意マーカー・不同意発話行為の方略について分析した。その結果は次の三点に集約された。

- (1) 日韓ともに、緩和表現の使用数は変わらなかった。韓国語の会話では否定形の使用割合が日本より多く、思想や推測の使用割合は 53.8% と最も高い結果となった。一方、日本語の会話では疑問詞の使用割合

が最も高く、言い切らない文がほとんど出てこなかった韓国語の会話に対して、日本は多数使用される結果となった。韓国語の会話は「생각해(考える)」という思考の緩和表現を使うことで、自分の意見をしっかりと伝えながらも、あくまで自分の考えだということを強調する効果を持たせる特徴があることが明らかとなった。

- (2) 日韓ともに、不同意マーカ―は不同意本体の前に使用され、効果的に不同意意見を伝える役割を果たしていた。日本語の会話では、自身の不同意意思を緩和させ、相手との摩擦を和らげるために不同意マーカ―が使われていた。一方で、韓国語の会話では自身の不同意意思により注目してもらうために、不同意マーカ―が使われており、不同意マーカ―を一切使わず、不同意本体のみを表明する場合も多かった。
- (3) 不同意表明の本体のみを見ると、日本語の会話でもしっかりと自身の不同意を表明していた。より正確に自身の意見を伝えるために、不同意マーカ―や緩和表現を使用していると考えられる。一方、韓国語の会話ではあまり不同意マーカ―は使わず、直接的に不同意の意思表示が行われることが多いことが確認された。不同意マーカ―を使用する際も、自身の不同意意見を相手に聞いてもらおうとする積極的な働きかけとしての役割を果たしていると考えられる。

本研究では、日本語も韓国語も同様に緩和表現の使用回数は変わらない、不同意マーカ―は日本語と韓国語の会話において効果的に不同意を表明するために使用されている、両国における不同意マーカ―の役割が相違している、不同意表明の本体のみを見るとどちらの会話においてもしっかりと自身の不同意を表明しているという4つの傾向を明らかにした。しかし今回は大学生のみを研究対象としており、年齢層や地域によっても不同意表明の仕方が変わってくると考える。この点を今後の課題としたい。

英語論文



An analysis of overlap in the TV comedy “Sam & Cat”

鷺見知也（1 部英米文化学科 指導教員：米坂スザンヌ）

Each of us has encountered situations in daily life when we have been in conversations where we have interrupted or been interrupted by someone else, as well as situations where we have spoken at the same time. In conversation, there is often overlap, which is when participants talk at the same time. Overlaps are bad when those who disrupt the flow of the discourse pose a threat to the territory of the speaker who is currently speaking (Truong, 2013). However, overlaps can be supportive when they are clearly collaborative and do not imply any sense of rivalry or interruption of the speaker's turn (Stubbe, 1998). This paper focuses on the impact of conversational overlap on the development of interpersonal relationships. The first few conversations in a new relationship are not likely to go entirely well. However, when the people get to know one another better, talking comes more naturally to them, and their conversations get smoother and smoother. My research question is: How is overlap used to establish the characters of Sam & Cat and to indicate their growing relationship?

The source material was the “Sam & Cat Season 1 Episode 1 #Pilot” Netflix video, a comedy on American television. To gather data, I watched the “Sam & Cat” Season 1 Episode 1 video on Netflix. From Readable (<https://www.allreadable.com/7382Hf3I>), I downloaded the script. To make it clear who was speaking, I included the line changes at the speakers. After that, I inputted every utterance into Excel. I continued to listen to the episode as I added speakers and finished the line adjustments. Finally, I gave the show three more listens to double-check the script's accuracy. Data on overlap

was gathered in a number of steps. I first watched the episode in order to comprehend the scenario and locate the overlaps. Next, I read the English script after seeing the video. I then identified the sentences that overlap from the script.

This paper found three main points in Sam and Cat's conversation. The first was that throughout Episode 1, Sam had 110 utterances and Cat had 125, indicating that there is almost no difference in their turn-taking rates. Second, the number of overlaps was 10 for Sam and 11 for Cat. Although the number of overlaps varied from scene to scene, there is no significant difference in the overall number of overlaps between the two characters. On the other hand, Sam uses more positive overlap (7 times) than Cat (4 times), while Cat uses more negative overlap (7 times) than Sam (3 times). This shows about their personalities. Sam has a very friend-oriented personality; thus, it seems to reason that she cares for Cat even though they are not yet close. In contrast, Cat uses more negative overlap than Sam because of her anxious, emotional personality and intolerance of criticism.

I had anticipated that both characters would have more positive overlap in order to develop their relationship, but this was not so. The patterns remained consistent throughout, for both positive and negative overlap. Thus, it appears that the most crucial factor in conversations in a newly-developing relationship is that both sides have a good balance in terms of the number of utterances, the amount of turn-taking, and the number of overlaps. Sam and Cat just seem to fit together rather well overall, making it probably extremely easy for them to converse and establish a relationship. Thus, the positive and negative aspects of overlap may not be as significant as the balance between the two people's utterances.